

幼児画の発達

(一)

——なぐり描き——

青 木 隆



1 はじめて描く絵

幼児はかなりはやくから絵を描き始める。一応つかまり立ちができてまだ歩けない時期に絵を描き始める幼児も少なくない。つまり生後十カ月から十二カ月の間とすることができる。——いくらかの家庭ではこの時期の幼児に鉛筆やクレヨンを持たせることを禁じてしまうので、もっと成長するまで描画を経験することなく過ぎてしまうのだが——

十カ月の女児はテーブルにおなかをおしつけてよりかかろうようにして立ち、五本の指をそろえて鉛筆をにぎって描いていた。

十一カ月の男児は両脚をなげ出して坐り、開いた脚の間に紙を

置き、クレヨンを上からわしづかみにして描点を連続的に描いていた。

このように初期の描画のための必要条件は、立つか坐るかして少なくとも片方の手を振りまわしてもなお、上半身の姿勢を保つことができ、鉛筆なりクレヨンなりにぎれることである。そして視覚が重要であることはもちろんである。

幼児の最初の「なぐり描き」は明確な意図があつて線を描いているのではなく、腕を振りまわしたり紙面をこすったり、たいたりする感覚運動的な運動であつて、たまたま手にもっているものがクレヨンであつたことから手の運動の痕跡が描線として記録されるに過ぎない……という説がある。しかし他方ではおとなたち

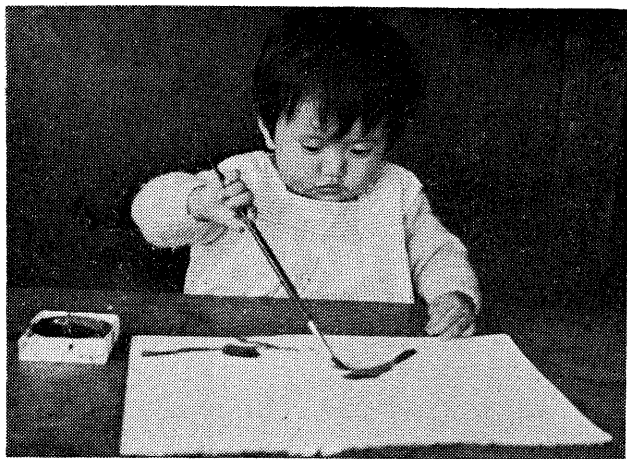


写真1 立って描いている1歳1カ月の女児、描画中は画面をみつめている。筆の持ちかたはスプーンと同じである。以下ここにあげた作例のすべては、この女児のみの作品である。

が手紙を書いたりする場面を見て、それを模倣することから描画が生まれるという考えもある。一般家庭での幼児はおとなたちの模倣で始まる例が多く、なかにはおとなが描いて見せ模倣をうながすようにしむけている例も少なくない。したがって後者の説が妥当のように思われる。

十カ月の女児に描画中わざと鉛筆の芯を上向きにして逆ぎにして手渡したところ、そのままのかたちで描画の動作をくりかえしたが、すぐにやめ右手から左手にと鉛筆を持ちかえて描き、うまく描けなければまた持ちなおすというように……何回か試みるうちにうまく芯が下向きになり描線が現われると安定して描画動作が継続された。

十二カ月の男児の場合は初めての描画経験であったが、クレヨンたたきつけるように描点を描き続けた。しかし視線は必ずしも画面に注がれていないのでクレヨンに似た棒をわたしたところ、同じ動作をわずかりかえしただけで棒をほうり出し、前に使用したクレヨンを要求し、持たせてやると落付いて全身ではねるように描点を描き続けた。

この段階の幼児でも描画中の視線は画面を注目している。(写真1)描く動作によって生じる結果を目で確認していることになる。なにかしらの印が現われなければ動作は中止してしまう。目で見ることで結果が現われることを予期して手を動かす……つまり「描く」という目的的な動作とみることができよう。

このようにして一歳末満の幼児でも絵を描くことを習得するのである。

絵を描き始めたばかりの段階の描線は一見して判別できるほ

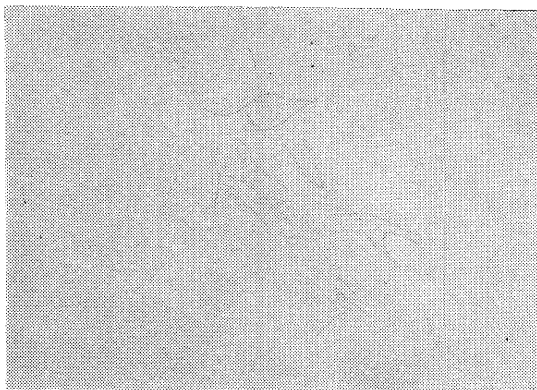


写真2 未分化描線 (C.A1 : 00)

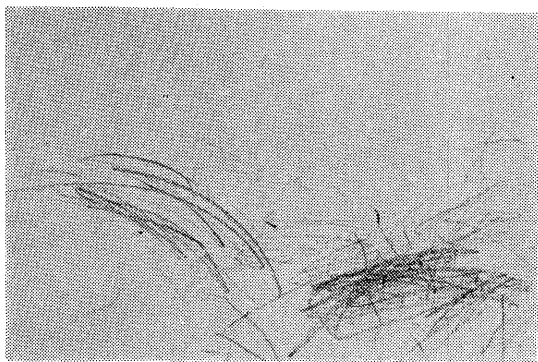


写真3 左右の往復運動描線、左手と右手をともに使う。すでに右手が優位であることがわかる。(C.A1 : 01)

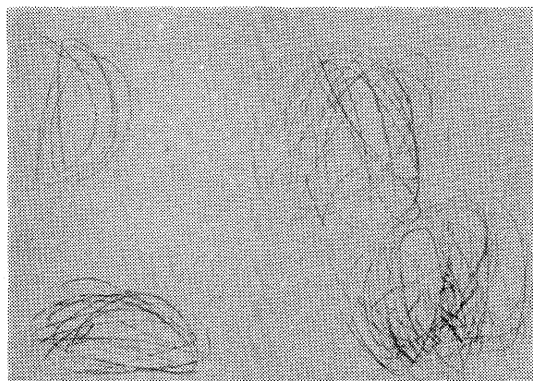


写真4 円運動描線 (C.A1 : 02) 左側の円は画面の末端に制約され変形している。

ど、よろよろと不規則であり、ローウェンフェルトは未分化描線と命名している。(写真2)クレヨンやマジックインキのように一定した線を描くのには有利な素材をあたえても濃淡や、太い細い、速度の遅速があり、停滞したり断絶したり、急激に曲ったり描線の方向も一定でない。これらの描画を観察すると手首や指が全く有機的に動いていない。描画の際の手の動きの発達は一般の運動の原則に従って、まず肩と肘が動き次に手首となり、最後

に指に至るものであるが、この段階の描画にあって指および手首の運動は全く未分化である。一見習字の懸腕直筆の筆法に類似しているが、幼児の場合は画面に対して同じ姿勢を保ちにくく、腕の運動そのものも円滑でないため描線はよろよろしてしまう。それにもまして大きな欠陥はクレヨンを一定の状態で保持することが困難な点である。そのためクレヨンは手の中で不規則に回転したり、画面に対するクレヨンの角度が垂直になったり横に寝たり

ふらふらする。その上筆圧とクレヨン保持のための力のバランスがとれない点やらが加わり、上記の諸条件と重複して不規則な回転や断絶、停滞、強弱、遅速が生じるのである。

2 感覚運動的描線

次の段階になると左右の往復運動による連続的描線が現われる。クレヨンを一定に保持することも一応できるようになり、筆圧との力の配分を感覚的に習得するようになる。とスムーズな連続的運動による描線が現われる。この時期は一歳から一歳三カ月以降で、初めて歩いたり簡単な単語をはなしたりする時期とほぼ一致している。

往復運動の最初の段階は描線もやや不規則で連続量もわずかであるが、完成期には量的にもかなり充実して左右に振る手の振幅もほぼ一定し、きわめてリズムカルに描かれる。このリズムカルな感覚運動的描画を出発点として幼児画は発達して行く。(写真

3)

完成期の左右往復運動による描線をよく見ると水平ではなく斜めの往復運動の場合が多い。また直線的ではなく正しくは円弧に近い。この段階ではまた手首は動いておらず、肘から先は棒のようになっているため、肘を中心点とし肘からクレヨンまでの距離

を半径とする円周の一部の往復運動ということになる。この際中心点としての肘の位置が固定されていないため、二度と同じ所を通過せず、ある拡がりをもつことになる。

往復運動描線の段階になると画面の内と外の区別は明瞭になり、時たまコントロールを失ったり、画面から視線がはなれてはみ出す程度となる。また一度なぐり描きをしたか所に無頓着に重ねて描き加えることも少なくなり余白をさがして描く傾向が強まっていく。包装紙などの大きな画面をあたえると、未だ描いていない空白をさがして移動しながら描くようになる。しかし満遍なく画面のどの部分も同じ密度で描かれるのではなく、漫然と散在しているといった感じである。

左右の往復運動描線が完成すると徐々にくずれていき、円運動描線に移行する。往復運動の折りかえし点は描線がするどい鋭角をなしているものだが、これが自動車レースのヘアピンカーブのように急激に曲がっている例を見るようになる。この急激なカーブは手首が動くことよって生じる。折りかえし点で手首を回転させる運動が往復運動に加わって、往復運動描線は不規則にくずれていき、やがて手首の動きのみが支配的となり、これだけに統一されたものが円運動による連続的描線である。(写真4)

円運動描線も初期は往復運動のなごりがあったりややおしつぶし

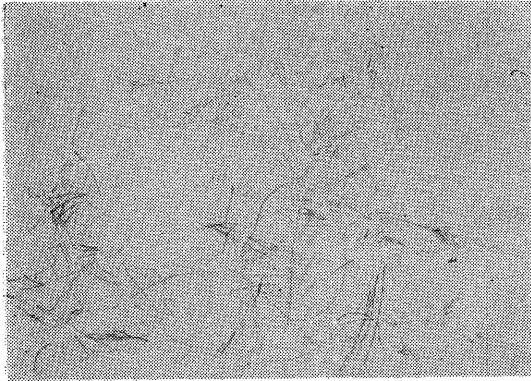


写真5 指の感覚運動による短かい往復運動描線と単一な直線
(C.A 1 : 02)

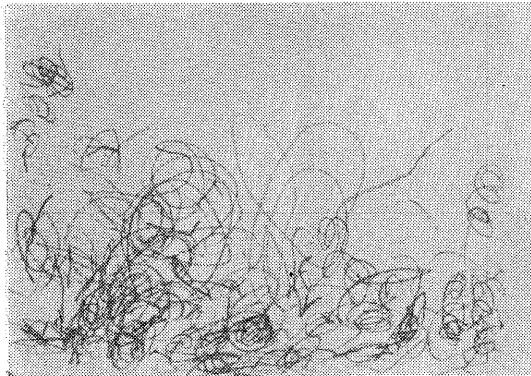


写真6 小円運動描線 (CA. 1 : 03)

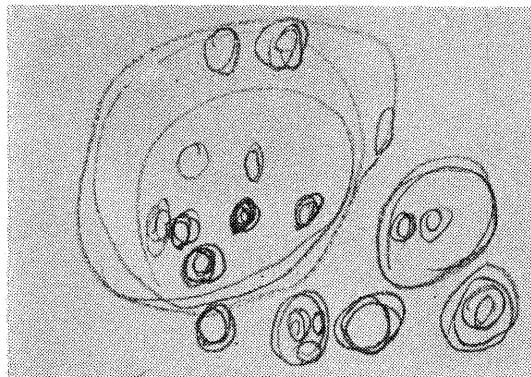


写真7 円ばかりによる人物画 (C.A 2 : 01)
目、鼻、口、ほほ、胸、すべて円のみで表示

たような形のものが多いが、完成期に至れば直径もほぼ安定してリズムカルな円運動となり連続量も多い。この時期は一歳三カ月から一歳六カ月頃とするのが妥当であろう。

円運動の時期になると画面の大きさが一層明確に把握されて来る。往復運動の段階では時たまはみ出すことはあったが、この時期にはほとんどはみ出さなくなる。また往復運動の段階では画面の大小によって振幅が変化する傾向もやや見られるが、円

運動の段階になると円の大きさは画用紙の大きさと関連するようになる。手首の回転運動は幼児の手のサイズや運動のメカニズムに基づく適度な円運動半径があるように思われるが、実際は紙の大きさに関連して円運動の大きさはコントロールされている。

なお一層注目すべき点は画面の中央に描かれた円運動と画面の端のものとは円の形が相違する点である。(写真4)画面の左右や上下の端に近い位置では円運動の一部がゆがんで平坦化し、

ひずみながらも描線はきわめてスムーズに連続されている。このように画面から規制されて描画を行なうようになり始めるのがこの時期でもある。この連続的な円運動描線が手首の感覚運動に由来するものならば、次の段階に現われる短かい往復運動描線や小円運動描線は指の関節の感覚運動といえる。円運動は小さくても五、六センチの直径はあるが、小円の場合は二センチから一センチ以下のものもある。そして短かい往復運動描線も小円運動描線も連続量ははるかに少なく、規模の小なものであるから画面の大きさに関連することもあり得ない。両者はほぼ同じ頃に現われ、一歳六カ月前後としてよいと思う。(写真5・6)

以上述べた往復運動描線・円運動描線・小円運動描線はいずれもリズムミカルな感覚運動的な腕や手首・指の運動に基づく描画であるが、経験的に一つ一つの過程を徐々に習得しながら発達していく一連の関係にある。そしてこれらの描画を母体としてより高次なものへと発達していくのであるから、この年齢に十分に描画を経験されることがのぞましいのは当然であり、なぐり描きを軽視してはならない。

3 独立した描線と円

手首や指の運動の分化によってなぐり描きは多種に発展してい

くのであるが、この時期にこれと並行して異質の描線も発達している。それは単独の直線であり、独立した円である。この両者は一連の感覚運動的な連続描線の発達過程が一段落すると新しく現われるものではなく、往復運動が完成すると一本だけのたどたどしい直線が現われ、円運動描線が完成すると独立した円が見られるようになる。また独立した描線が初めて現われる場合は、画面に一本だけの直線が描かれるのではなく、一般に連続運動描線と同一画面に共存している。しかし描線が質的に相違しており作品を見るだけでその判別はさして困難ではない。一般にこの種の直線の特徴は速度が往復運動描線に比して遅く、弱々しく太さが均一でないものが多い。

左右の往復運動による描線の後に水平な単一の描線が、そして何重にもグルグルとくりかえされる円運動の後に独立した円が現われることは興味深い問題である。往復運動の際の腕の運動から、横のボタンが抽出され単一の描線が生まれ、同様に手首を回転させる運動のボタンの抽出によって円が生まれると考えることができよう。このようにくりかえされる運動の中から、ひとつに集約された運動のボタンを抽出する能力は、感覚的ではあるが知的なもの一種である。精神薄弱幼児は感覚運動的な往復線から円運動、小円運動描線へと移行し発達していく過程は、普

通児の場合ときして変わるものではない。しかし往復運動の後に単一描線が、そして円運動の後に独立した円が現われるというようなことがほとんど見られない。つまり感覚運動的な描画の中から直線や円を抽出し、新しい領域へと脱皮していくことができにくいのである。

独立した円はその後の発達のためにきわめて重要な役わりはたす。なぐり描きの段階からの幼児画の発達について興味ある研究を行なったグレッツインゲルはこの種の円を特に「根源的な円」と名づけて重視している。円はとぎされた空間を作る。とぎされた空間は地と図がらの関係をなりたさせる。そして円の内と外とは区別さるべき異質の空間となっていくのである。

ただしこの段階の幼児は、円を描いても円のもっている「まるさ」を理解している訳ではない。年少幼児は事物の存在をすべて円で表示する場合が多い。(写真7) 外林大作がレウインの例にならって精薄児に対して行なった蜂の巢形模写の研究の中に、六角を円として表示していることが記録されている。またベンダーのゲシュタルト・テストの場合も年少幼児は四角形や六角形を円として表示することが記されている。年少幼児の描画の場合にもこの傾向が強く、大小の円のみを羅列したような作品もよく見られる。この場合の円は事物の存在を表示する一種の記号である。

この段階では円はすべての形態を包括するものではあるが、幼児が最初に獲得する基本的形態は円であり、これによって情報を視覚的に伝達する最も原始的で発生的な記号を得たことになる。

4 描線の操作と形態の探索

円と直線が描けるようになれば、これらを組み合わせごく簡単な顔ぐらい描けそうに思えるが、これから初めて人物画を描くまでの期間はかなり長い。少なくとも六カ月、一年以上に及ぶ例もまれではない。

一歳の後半から二歳にかけての描画は、描線の操作や形態の探索・操作に終始しているといっても過言ではない。一連の連続運動描線の段階が出どころになると、描線の操作が始まる。単一の描線を直線と述べたが、これも円のまるさを意識せずに円を描いているのと同様、直線のもつ「まっすぐさ」を理解しているのではなく、何も操作しないからまっすぐなだけの直線なのである。初期の描線の操作は感覚運動的要素が強く、(写真8) 徐々に意図的に操作する傾向が増し、(写真9) やがて探索行動的な要素が強まり、初歩的なパターンの構成がみられるようになる。(写真10) そしてこのような段階に到達すると、時には人物などの主題が描画に先行して意図され、その主題に向かって試行が執

拗に重ねられるようになる。(写真11・12)

人間像を描き始める時点は個人差が多く、二歳前後の場合もあるし、三歳過ぎの場合もある。しかしこれは一概に知的水準の高低に起因するとのみい得ない。二歳から継続的に人物画を描き、徐々に内容を高めながら三歳に至った幼児の作品と、三歳で初めて人物画を描くことができた幼児の作品とを比較して、両者に質的な差違がない場合がかなりみられる。(例えばグッドイナ

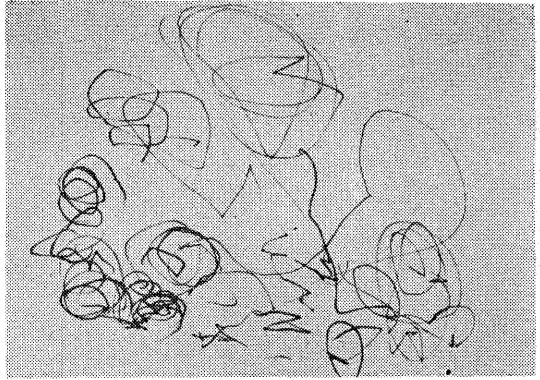


写真8 独立した円への移行と感覚運動的描線の操作 (C.A1 : 04)

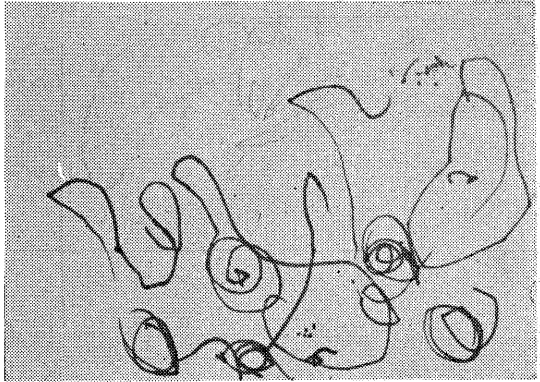


写真9 感覚運動的要素が後退していく過程の描線操作 (C.A1 : 05)

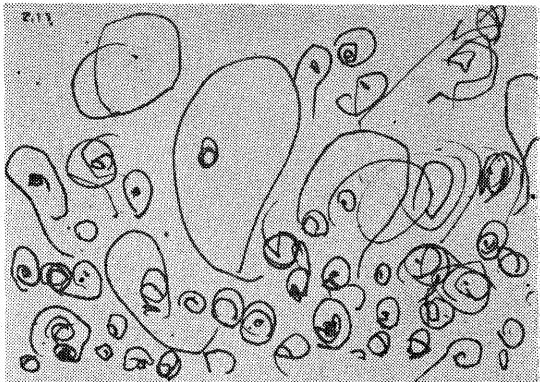


写真10 円と小円の操作を主とする初歩的パターンの探索 (C.A1 : 05)

ップの人物画検査法の得点に差がみられない等) 前者は未熟な操作的段階ではやくも人物像を習得し、その後並行的に形態の探索や操作を行なって逐次人物画を質的に高めていったのに対し、後者は高次な形態の探索・操作の段階を経たうえで、初めて人物画を描いたものであって、結果的には両者の人物画に質的差違を生じなかったと考えられる。このように描線や形態の操作・探索行動は描画の発達の原動力的な役割を果すものである。それゆえ年

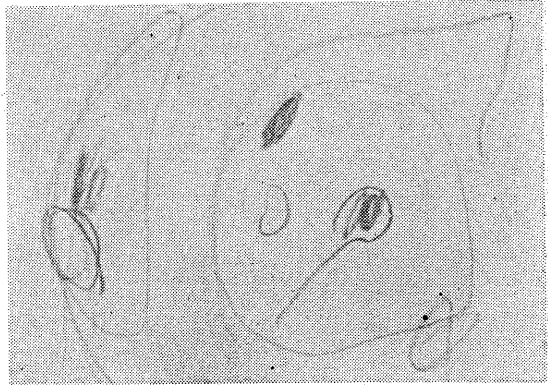


写真11 顔を意図した試行 (C.A1 : 06)

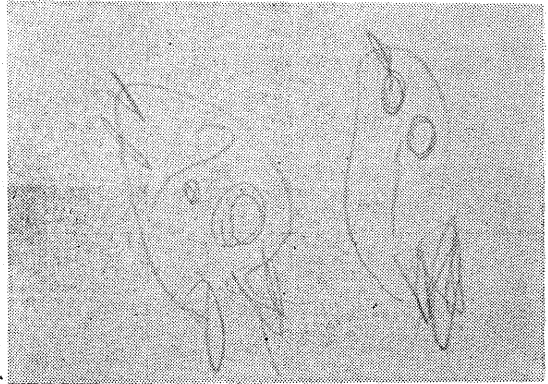


写真12 顔を意図した試行「オバQ」という (C.A1 : 09)

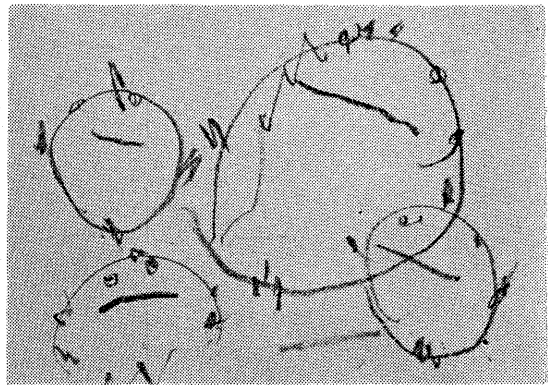


写真13 初期の人物画 (C.A2 : 00) 手、足がある

少幼児の場合は単に人物画を描かないことをもって発達のおくれであるかのようには断定することは危険である。むしろ診断的には探索行動的描画の量・密度・質的な内容等を考慮すべきであると思う。(写真13)

たしかに何々を描きたいというように具体的な主題を先行させた描画と、一見無目的な抽象的図形を羅列した作品とは、異質なものにみられがちだが、両者は両極端に孤立して対立する存在

ではなく、本来連続的な存在である。特に年少幼児の描画は先行する明確なイメージが内在して初めて描画活動が行なわれるのではなく、作品はでき上がってみなければどんな結末になるのか、当人にも見当もつかないものである。このように抽象的図形による構成あそび的描画と主題先行の描画の距離は少ない。そして構成あそび的な操作的要素の強い描画こそ、全く自発的で柔軟な発達への貴重な実験室である。また構成あそび的操作によって

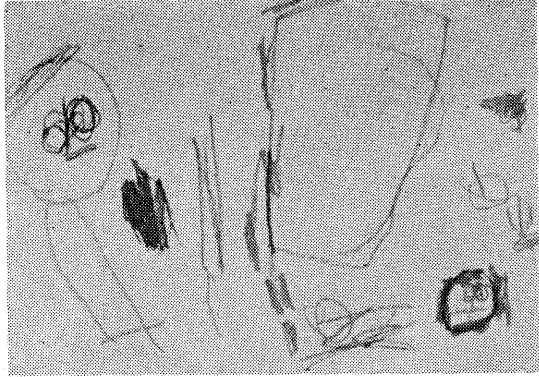


写真14 形態の探索により四角形が現われると、胴が四角形によって表示される。(C.A 2 : 03)

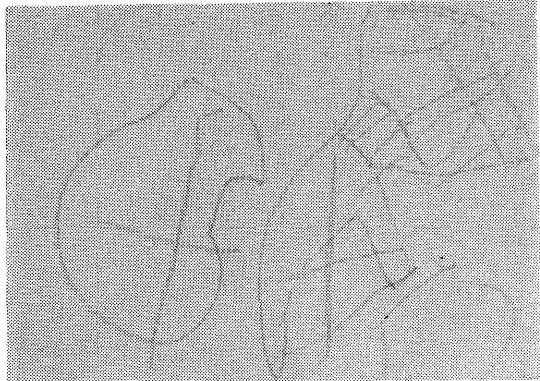


写真15 形態の組み合わせによる構成あそびの描画 (C.A 2 : 04)

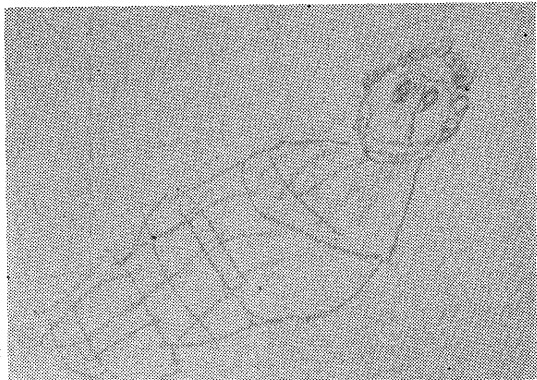


写真16 15のすぐ後に描いた人物画「ねているひと」 抽象的図形の構成あそびがそのまま人物画に反映されている。

試み習得した結果は、具体的主題をもった描画の中に反映し、その内容を高め表現をゆたかなものにする。(写真14・15・16)

この実験的な抽象的図形の構成あそびに強い興味を示し、バラエティーに富んだ操作を執拗に試みている幼児は、知的に高い水準にある。これに反し精薄幼児はたとえ人物画が一応描けるにしても、この図形の構成あそび的描画にはほとんど興味を持たず、そのため新しいフォルムを獲得するための道はおのずとこぎやられ

ステレオ化していくのである。

引用文献

Bender, L. A Visual Motor Gestalt Test and its Clinical use, 1938

Groezinger, W. (英訳) Scribbling, Drawing, Painting (和訳) 幼児画の謎 1970

Lowenfeld, V. (和訳) 美術による人間形成

外林大作 児童心理学——児童画と知能——1948